

カール・ディームの「スポーツ教育」論にみる「身体」と「権力」

Über Körper und Macht in der Theorie der Sporterziehung Carl Diems

釜崎 太*

Futoshi KAMASAKI*

Zusammenfassung

Dieser Beitrag beschäftigt sich damit, wie die Theorie der Sporterziehung Carl Diems als Disziplinierung des Körpers funktioniert hat.

Bis Ende des 2. Weltkriegs hat er den Fokus der Sporterziehung darauf gelegt, die “Jugend zu disziplinieren”. Nach seiner Deutung ist die sportliche Konkurrenz gleich dem militärischen “Kampf” und die Sporterziehung kann zur optimalen “Wehrkraft” für das Vaterland beitragen. Seine Bemühungen haben einen großen Erfolg für den Sportbereich erbracht. Denn das obligatorische Schulfach “Leibeserziehung” und die sportliche Organisationen wurden systematisch und quantitativ ausgedehnt.

Nachdem das Regiment vom Nationalsozialismus übernommen wurde, sind zwar alle sportliche Leiter dem NS-Regime nachgefolgt, aber man muss eingestehen: seine Theorie der Sporterziehung hat unter diesen Umständen eine besondere Rolle gespielt. Denn hat sie dem NS-Regime die sportliche Nutzwerte geliefert, um dessen Ideen und Überzeugungen zu propagieren.

Nach dem Zweiten Weltkrieg ist Diem immer noch ein sportlicher Leiter gewesen und hat “Freiheit” als die wichtigste Bedeutung der Sporterziehung angesehen. Er hat Folgendes behauptet: Sport treibt man freiwillig, es gibt aber keinen Unterricht ohne Zwang, daher muss der Sportlehrer den Schüler solchen Zwang möglichst nicht spüren lassen. Diem hat unter dieser Voraussetzung “Gesundheit”, “Rekord” usw. als die sporterzieherischen Ziele festgesetzt. Das heißt, dass er nach dem Zweiten Weltkrieg den Schulsport von der “Fremddisziplinierung” mehr zur “Selbstdisziplinierung” hin ändern wollte.

Auch vor dem zweiten Weltkrieg hat er nicht nur der “Nation” eine wichtige Bedeutung zugemessen, sondern auch schon der “Selbständigkeit” und dem “freiwilligen” Handeln. Zum Beispiel hat er das freiwillige “Opfern” für das Vaterland mit einer idealischen Vorstellung des Körpers verknüpft: Diem bildete in seiner Erzählung “Der Läufer von Marathon (Untertitel: Eine Erzählung aus dem Altertum)” den legendären Sieg der Athener über die Perser im Jahr 490 ab. Der symbolische Körper des Helden in der Erzählung wurde als “ebenmäßig, muskelkräftig”, “mit blonden, lockigen Haaren” und “lang aufgeschossen, feingliedrig”, wie die Figur Xenophons dargestellt. Diese exemplarische Figur galt auch als die soldatische Norm. Der Held hat durch seinen freiwilligen “Opfertod” den Höhepunkt seines Lebens als Überbringer der Siegesnachricht erreicht. Diese Erzählung wurde 1941 bei Reclam sowie 1943 in der Soldatenbücherei des Oberkommandos der Wehrmacht nochmals aufgelegt. Auf dieser Weise ist die Theorie der Sporterziehung Diems in die Strategie des NS-Regimes eingeflossen, die die aus dem alten Griechenland stammende Legitimität der deutschen Nation symbolisch propagieren wollte.

Schlüsselwörter : Körper, Symbol, Selbstdisziplinierung

* 弘前大学教育学部保健体育講座

Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University

1. はじめに

市民階級が社会的地位を確立させ、国際市場に進出し始める世紀転換期のドイツでは、青少年民族遊戯振興中央委員会（Zentralausschuss zur Förderung der Jugend- und Volksspiele：以下「遊戯中央委員会」）の活動のもと、一方では、ドイツ体操連盟（Deutsche Turnerschaft—1868年設立：以下「DT」）に位置するトゥルンフェライン（Turnverein：直訳はドイツ体操クラブ）のなかにスポーツが普及する一方で、各種のシュポルトフェライン（Sportverein: 直訳はスポーツクラブ）が組織され、それぞれの種目を統括するスポーツ連盟が設立され始める。その結果、DTと各スポーツ連盟は、国内の覇権をめぐる鋭く対立することになる。この20世紀初頭から終戦までの「トゥルネン＝スポーツ」抗争の過程において、スポーツ教育の推進者として活躍したのがカール・ディームであった。ディームは「20世紀初頭から、後半にかかるまで、ドイツのスポーツ・体育領域に発生した諸問題のほとんど」¹⁾に関与したと言われるように、20世紀前半のドイツを代表する体育・スポーツのイデオログであった。

しかしながら、第二帝政、ワイマール共和国、両世界大戦、東西ドイツの分裂という激動の時代に、体育・スポーツの制度的拡大に貢献してきたディームには、分裂的な評価がつきまとっている。一つには、その制度的拡大への積極的な評価である。例えば、日本の代表的なディーム研究者である加藤元和は、ディームが国家社会主義と「なんらの関係」も結ばなかったという以上に、「ささやかな反抗を試みた」とその戦争責任を否定した上で²⁾、ディームの「スポーツ教育」論を「自己教育」と「人間性の回復」を求めるものと称賛している³⁾。一方、ディームを「スポーツと国家社会主義の媒介者」とみなす評価も存在している。例えば、トーマス・アルケマイヤーは、「戦後のディームは、ナチ体制への反対者、そして犠牲者として自らを描いているが、これは実証的に間違いである。彼自身の手による人物史の美化に反して、彼はナチ国家に12年間奉仕してきた」⁴⁾とディームの戦争責任を断罪している。

1995年、ドイツ第二テレビ（ZDF）のプロデューサー、ラインハルド・アペルは、ヒットラー・ユージェントでの自らの体験をテレビ番組

において告白するなかで、次のようなディームの演説を公表し、国内世論に大きな影響を与えた⁵⁾。「英雄として死す、献身の死は恥ずべきものではない。祖国のために死ぬことは美しいことである」。このアペルの言葉は、すでに1984年に証言されていたにもかかわらず、メディアでは公表が差し控えられていたと言う⁶⁾。さらに、1999年には「消息不明」と記されていたディームと国家社会主義との関係を証明する公文書が「再発見」されている。アヒム・ラウドらは、ドイツ体育界の国家社会主義への追従を「第一の罪」、戦後の指導体制の継承を「第二の罪」と呼ぶならば、戦争責任に関する証明資料を公にしえなかった事実は「第三の罪」にあたりと断罪している⁷⁾。90年代後半には、ディームが学長を勤めたドイツ・スポーツ大学ケルンでの学術会議において、ディームの戦後責任の一端が報告されるなど、今日、ディームが国家社会主義と共犯関係にあったとみる評価はドイツ体育界で広く認められている。

本研究では、特に日本で美化される傾向にあったディームの「スポーツ教育」論を再検討し、ディームの「スポーツ教育」論の「身体」への権力作用について明らかにする⁸⁾。



図1 アペルの証言後、「カール・ディーム通り」の名称が変更される（写真提供：ユルゲン・シュトライヒ氏）

2. ディームの問題意識とスポーツの組織化

2.1. 国家主義の萌芽

1882年にヴェルツブルクに生まれたディームは、父親の転職を機に、16歳でベルリンに転居し、トゥルンフェラインに参加する。しかしその一方で、ディームは、体操中心の活動を嫌悪し、トゥルンフェラインでの活動中にも遊戯に興じていたと言われる⁹⁾。ソファーや台所の床で寝起きすることもあったほど貧困な家庭に育ったディーム

は、家計の逼迫のために高校の中退を余儀なくされ、商店に職を求め、スポーツへの思いも捨てきれず、勤めのかたわら私設のシュポルトフェラインを結成し、1903年にはドイツ陸上競技連盟(Deutsch Sportbund für Athletik)の活動に関わるようになり、雑誌にスポーツ関連の記事を寄せるなど、スポーツ関係の仕事に従事するようになる。

1904年には「一年間の志願兵」として第二親衛隊に参加している。ディームはその収入のよさと軍事行進の興奮から、後年、そのときの経験を「恍惚の経験」として語っている。ところが、商人であることを理由に、一年間の満期を待たずに除隊させられ、ドイツ・スポーツ局の陸上競技部に編集の仕事に就く。ドイツ・スポーツ局の性格上、ディームは陸上競技の組織化(ルールの統一化、組織の一本化)という仕事にも携わっている。さらに、同じ時期に、ドイツ・オリンピック帝国委員会(Deutschen Reichsausschusses für Olympische Spiele:以下「オリンピック帝国委員会」)にも参加し、「国内オリンピックの開催」と「国際オリンピックへの参加」のための取り組みを開始している¹⁰⁾。この時期に、スポーツをドイツ国内に広めていこうとする彼の根本的な姿勢が形成され、組織者としての資質が育まれたものと考えられる。

ディームは、1905年には、イギリスのスポーツ大会に倣って、ベルリンでクロスカントリーの大会を主催し、さらにドイツではじめて国家に承認されたスポーツ大会となる25km マラソンの開催にも成功する。1906年にアテネで開催されたオリンピック特別大会¹¹⁾には、自ら志願して特派員として随行し、その執筆活動が認められるかたちで、帰国後は『アルゲマイネン・シュポルトツァイトウング』の編集者に抜擢され、『シュポルト・イム・ビルト』や『ベルリナー・ロカールアンツァイガー』などの雑誌に記事を掲載するようになる。こうしてディームは、スポーツ・ジャーナリストとしての地位を固めると同時に、貧困な階層からの社会上昇を果たしたのである。

1912年のストックホルム国際オリンピック委員会で、1916年のベルリン・オリンピックの開催が決定されると、ディームの組織能力を高く評価していたオリンピック帝国委員会の会長ビクター・フォン・ポドビールスキーによって、ディームは大会事務局長に任命される。事務局長に就任した

ディームは、さっそく自らが団長となって、当時、世界でも有数の競技力を誇っていたアメリカの視察旅行へと出かけている。その成果をまとめた報告書では、「施設の建設」「専門スポーツ教師の養成」「学校トゥルネンのスポーツ化」「学校スポーツフェラインの創設」「競技会の開催」「大学におけるスポーツと体育の必修化」が提案されるなど、その後に展開されるディームの「スポーツ教育」論の基本的な問題意識が示されている。と同時に、その報告書には、ディームの軍国主義への追従の姿勢もあらわれていた。ディームは次のように主張している。「素晴らしいスポーツマンたるに必要な、完全な身体的・道徳的な性質を備えた素晴らしいスポーツマンは、常にまた、卓抜な兵士でもある。(中略:引用者)したがって、トゥルネンの時間による身体的な形成は、よりスポーツ的な精神によって、すなわち闘争心(Kampfesgeist)によって満たされなければならない。軍隊の完全で包括的な組織によって、まさしくドイツ民族(deutsches Volk)は、正しいものとして見極められた理念を素早く国民(Nation)の公共財産にしえるようになる¹²⁾。さらにまた、同じ時期のディームが、体育の義務化によって「ドイツ民族に再び活気を与える人間」が形成され、「支配的な意志、燃え上がる精神と結びつけられた身体、名誉にむかう魂を飼い慣らすことによって、新しい世代が育成される」のだと説明していたことも指摘されている¹³⁾。

ディームは、ポドビールスキーの指示のもとに、ベルリン・オリンピックのためのスタジアムの建設に取り組むが、ラウドらによれば、その際にもディームは「このスタジアムによって、ドイツのスポーツを、まさしくドイツの文化に昇華させることができる¹⁴⁾」と主張すると同時に、スタジアムの竣工式に皇帝夫妻を臨席させるなど、国家的な行事色をドイツ国内にむけてアピールした。「もし人々が国民の健康と防衛力を保持しようと望むならば、このオリンピック競技は、私たちにスポーツの重要性をより強く認識させてくれるであろう。(中略:引用者)オリンピック競技で起ることを視野に入れることは、軍隊への興味と同じことである¹⁵⁾。さらに、オリンピックの開催によって、「ドイツの経済と工業を広めるだけでなく、軍事的な力をも、素早く強烈に広めることができる。1916年の競技は、国民が我々の世界

での地位を確認するための方法となるに違いない¹⁶⁾。こうしたディームの働きかけの背後には、オリンピックの誘致に反対していた体操家たちに、ベルリンでのオリンピック開催を認めさせようとする意図があったことは想像に難くない。

もちろん、ドイツがオリンピックの誘致に成功し、ディームがオリンピック開催のための準備を進めた20世紀初頭のドイツは、29歳のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世の皇帝即位（1888年）とオットー・フォン・ビスマルクの退陣（1890年）による外交政策の転換が、戦争の危機を予感させ始めた時代であった。ヨーロッパ列強が帝国主義の時代に突入し、対外膨張政策を推進するなかで、積極的な海外進出を目指したヴィルヘルム二世が露独再保障条約を打ち切り、ドイツ艦隊の拡張政策を表明するなど、誰の目にもヨーロッパでのドイツの孤立は明らかになっていた。さらに、ヴィルヘルム二世が戦争への国内協力体制の確立を優先させる一方で、独仏戦争への報復の機会をうかがうフランスが露仏軍事同盟を成立させ、1905年には第一次モロッコ事件（ドイツ艦隊の演習）が勃発するなど、ヨーロッパの多くの人々が開戦を予感していた。この第一次世界大戦の前夜とも言うべき時代に、ディームが国家主義的な傾向をおび、軍国主義への追従の姿を示していたとしても何ら不思議ではなく、そうした時代的な背景を踏まえるならば、ディームの国家主義を安易に批判することは許されない。しかしそれでも、ディームがすでに第一次大戦前から軍国主義への追従の姿を垣間見せていたという、日本のディーム研究において見逃されてきた事実は、その後の彼の理論形成を考える上でも、重要な示唆を与えるものであろう。

2.2. 「トゥルネン＝スポーツ」抗争

国家主義に傾倒していたディームはしかし、青年期にトゥルネンの活動に退屈していたためか、排外主義的な国家主義を掲げていたトゥルネンの信奉者とはならなかった。その事実は、トゥルネン中心の学校体育にスポーツ教育を導入するように訴えたアメリカ視察の報告書のなかにも示されている。

そもそも、オリンピック帝国委員会の母体となった「ドイツのオリンピック大会参加のための帝国委員会（Komitee für die Beteiligung

Deutschlands an den Olympischen Spielen：1911年にオリンピック帝国委員会に改称）」は、1896年の第一回アテネ・オリンピック大会への公式参加を目指して、1895年に設立された組織であった。しかし、DTと遊戯中央委員会の反対にあって、オリンピックへの公式参加を断念させられた経緯がある¹⁷⁾。周知のように、1896年のオリンピック大会は、1894年のオリンピック復興委員会で計画されたものであったが、その委員会でピエール・ド・クーベルタンは、オリンピック開催のために各国のスポーツ組織を体系化・一本化させるように提案している。この提案にしたがって、ドイツにおいても国内のスポーツ組織を一本化させようとする動きが台頭し、ピリバルド・ゲッパルトを中心に「ドイツのオリンピック大会参加のための帝国委員会」が結成されたのである。当然、それまでドイツ国内の全統一組織を自認していたDTにとっては、国際的にドイツを代表しようとする組織の存在は許容できるものではなかった。DTは、オリンピックの第二回大会が敵国フランスの国威発揚に利用されることなどを理由に、オリンピックへの参加を批判し、同委員会に対する一切の妥協を拒否している。この対立が、国内組織をめぐる問題となって各種スポーツ連盟との対立にまで発展していくのである。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツでは、トゥルンフェラインと組織原理を異にするシュポルトフェラインが各地で設立され、それに続けて種目別のスポーツ連盟も設立されていた（例えば、1883年のボート連盟、1900年のサッカー連盟）。1898年には陸上競技を母体としながら「ドイツ競技者スポーツ連盟（Deutscher Sportbehörde für Athletik：以下「競技者スポーツ連盟」）」が結成され、ディームは1903年にその執行部に参加し、1908年から1913年まで会長を務めている。当初、会員がトゥルネンを軽視するようになるのを恐れ、シュポルトフェラインとの交流を認めなかったDTも、非公式的な交流の促進に抗いきれず、会員の流出を阻止する目的から、1910年に「シュトラスブルク決議」を採択し、シュポルトフェラインとの二重加盟を認めている。この決定によって、トゥルンフェラインとシュポルトフェラインの交流が進み、今日、日本でも注目されている「複合種目型トゥルンフェライン（gemischter Turnverin）」、トゥルンフェラインとシュポルト

フェラインの「混成型組織 (Mischtyp des “Turn- und Sportverein”）」が組織されたのである¹⁸⁾。しかしながら、「国際性」や「競争性」を特質とするスポーツは、体操家たちの「国家主義」「民族主義」「排外主義」やトゥルネンのドリル練習とは相反する価値規範をもっていた。DTの指導部やその信奉者たちは、スポーツの発展とともに、スポーツを「非ドイツ的なもの」とみなすようになり、そうした批判がオリンピックへの参加をめぐる噴出するのである。

例えば、DTを代表するエドムント・ノイエンドルフは、ディームが主張する「最高統括団体の必要」に賛意を示しながらも、DTによる統括を主張し、スポーツの「一面性 (Einseitigkeit)」「全力 (voller Einsatz)」「闘争への意志 (Wille zum Kampf)」を批判している。「一面性」とは、「多面性 (Allseitigkeit)」を本質とするトゥルネンが全身運動を促すのに対して、走・跳・投などに専門化したスポーツは身体諸器官の部分的な肥大と萎縮を進行させるというものである。「全力」とは、健康と精神鍛錬を本質とするトゥルネンに対して、スポーツにおいては身心ともに疲労困憊するまで全精力がつき込まれ、その結果、健康状態を害してしまうとする批判である。さらに、「闘争への意志」とは、「国民の民族意識を育てる」ことを本質とするトゥルネンに対して、スポーツの「競争 (Wettkampf)」は他人より優れた成績をおさめようとする名誉欲に支配されたものとみなされたのである。このような見解は、ノイエンドルフのみならず、ナチ体制下においてトゥルネンとスポーツの組織的な統一が果たされるまで、一貫して体操家たちがもち続けていた批判であった¹⁹⁾。

競技者スポーツ連盟やオリンピック帝国委員会にとっても、DTとの二重登録は国家を代表する組織としての国際的な信頼を脅かすものであった。1912年には、ディームがDT宛てに「和解」を求める公開状を送っている。その内容は、DTが「最も強力な組織」であることを認めた上で、競技者スポーツ連盟とDTの独立を前提とし、管理上の問題として各種のスポーツ団体はスポーツ連盟に所属し、その連盟を統括する競技者スポーツ連盟の存在と選手権大会の開催を承認するように求めるものであった。しかし、DTの会長フェルディナンド・ゲッツは、きっぱりとディームの共存論を拒否した上で、体操家の数的な優位を背景

に、会員の登録問題は完全に個人の自由であると反論している。ゲッツは、そもそもフリードリヒ・ヤーンのトゥルネンのなかにはスポーツと呼べるものが多数あり、今後も体操家たちは、その活動を「愛国心」と「ドイツ民族の精神」の育成を目的としながら続行していくのであって、逆にスポーツこそが不健全な行き過ぎを打破し、祖国の未来のために貢献しなければならない、と主張したのである²⁰⁾。

ところが、1913年、ヴィルヘルム二世臨席のスポーツ大会において、体育的活動の中心をトゥルネンからスポーツへと移行させようとする意図のもとに、プロイセン陸軍省が両者の調停にのり出すことになる。両組織の独立的な存在を認めさせたその調停以降、シュポルトフェラインの会員数の増加に拍車がかけられている。陸軍省が愛国主義的なトゥルネンから国際主義的なスポーツへの移行を画策した背景には、国際的な次元でのスポーツの隆盛という現実的な動向があったものとみられるが、ディーム自身にしてみれば、陸軍省の調停という成果は自らの努力によって獲得されたものであった。加藤はディームの言葉を次のように伝えている。「若年からの私の努力は、ドイツ国防軍における身体訓練をスポーツ化することであった。1913年に、皇帝ヴィルヘルム二世が発布した法令の中で、ドイツ陸軍内部に、スポーツを組み入れたのは、確実に、皇帝陛下が、私の見解に触発されたからに違いない²¹⁾」。

さらに、第一次大戦のために、ベルリン・オリンピックの開催が不可能になると、ディームを中心とするオリンピック帝国委員会は、国際的なスポーツ大会への参加を断念し、挙国的なスポーツ統合の意味から、国内スポーツの整備に専心するようになる。1916年には、「スポーツ義務法」が立案され、学校、フェライン、軍隊における体育を統合する主旨のもとに、「青少年の防衛力」と「祖国的精神」の育成が体育の目的として掲げられ、「学校体育における授業時数の拡大」、「フェラインにおける義務制スポーツの準備」、「フェラインへの軍事体操の導入」などが主張された²²⁾。さらに、オリンピック帝国委員会は1917年に「ドイツ体育委員会」(Der Deutsche Reichsausschuss für Leibesübungen：以下「体育委員会」)へと名称を改め、1920年には国内的なドイツ競技大会 (Deutschen Kampfspiele) を開催するようになる。

ラウドらによれば、体育委員会においても引き続き事務局長を務めたディームは、国内大会の主旨を次のように説明していた。「戦争は、我々に、ドイツのスポーツの必要性を教えている。祖国の大輪は、戦争への準備にかかっている。(中略：引用者)ドイツのスポーツは祖国に貢献する。それ以外の目的はない。ドイツのスポーツは自己目的ではない」²³⁾。しかし、体育委員会の単独でのスポーツ大会の開催に反発したDTは、1922年に二重登録制を廃止し、イギリスのスポーツは「国民」や「民族」の精神を失った技術的な機械であり、その個人主義的な競争が共同体性を破壊し、記録の一方的な追求が健康を害するとスポーツの「教育」的な効果をまっこうから否定するようになるのである。

3. ディームの「スポーツ教育」論

3.1. 戦前の「スポーツ教育」論にみる軍国主義

ディームが「スポーツ義務法」においてスポーツ教育の振興を強調していたように、ディームはスポーツ教育の強力な推進者であった。特に、ディームにとって、スポーツが著しい量的拡大を遂げる第一次大戦前後の時期は、トゥルネンにはない、スポーツの新しい教育的価値を主張する絶好の機会であった。例えば、第一次大戦の直前、DTの加盟者約130万人に対し、競技者スポーツ連盟の加盟者は約40万人にとどまっていたが、第一次大戦後の1920年には、競技者スポーツ連盟の加盟者は約75万人にまで増加し、労働者スポーツ連盟の64万人を加えると、DTの約125万人を上回るまでに成長している²⁴⁾。もちろん、スポーツが量的に拡大していく社会的な背景として、ドイツの政治的・経済的な安定があったことは言うまでもない。しかし、逆説的にも、トゥルネンとの抗争がスポーツ連盟への加盟者を増加させたという側面も、興味深い事実である。DTと加盟者を奪い合うかたちとなった新興のスポーツ連盟は、加盟者の獲得のために、制度的な整備を強力に推し進めたのである。こうして、「1920年代はドイツの他の精神文化にとってと同様に、スポーツと身体文化にとっても『黄金の時代』」²⁵⁾を迎え、「スポーツはトゥルネンの一部ではなく、すべての身体運動の形式と方法の総合概念(Sammelbegriff)になった」²⁶⁾のである。

このスポーツの量的拡大を背景に、ディームは

スポーツの組織化と同時に、学校体育の拡大にも取り組むようになる。ディームは、まず、体育教師の養成機関を創設すべく「体育大学」の設立に尽力する。ディームが体育大学を設立するまで、体育教師の養成は、いくつかの州に設置された体操教師養成所における経験主義的な教育にゆだねられていた。それゆえ、経験主義的な指導法が継承され、トゥルネンを中心に構成される学校体育の内容もそのまま継承されていた。ディームは、トゥルネンの経験主義的な伝統を戒め、「近代的教育思想と合理的思想を持った『体育教師の養成のために体育大学』を設置しようと計画」²⁷⁾し、1916年のベルリン・オリンピック大会のために建設された国立スタジアムを拠点に、ドイツ体育大学(Deutsche Hochschule für Leibesübungen)を設立する。自ら学長に就任したディームは、共和国政府とプロイセン州政府から補助金を獲得することにも成功する。体育委員会は、ドイツ体育大学の設立の趣旨を、①体育・スポーツの普及、②体育教師養成、③教科としての体育科の発展、④体育科学の発展と説明しているが²⁸⁾、その一方で、DTの「スポーツ教育」批判に対して、スポーツの教育的価値を科学的に証明していこうとするディームの意図があったことも指摘されている²⁹⁾。

ディームは、体操家たちの批判に対して、スポーツの「自然性」と「文化性」を強調する「スポーツ教育」論を展開した³⁰⁾。ディームにとって、スポーツは「近代化した社会」「技術化した社会」が失ってきた「自然への憧憬」を表現するものであった。人為的に組織化されたスポーツは、「精神文化」と同じように価値のある、新しい「身体文化」である。スポーツの競争は破壊的なものではなく、創造的なものであり、青少年たちに未来と進歩をもたらすものである。そして、スポーツ教育による「青少年の規律化(Jugend zu disziplinieren)」と「思慮深い人間のしつけ(überlegene Menschen zu züchten)」は、「新しく、若く実り豊かな世代(neues, junges, aufblühendes Geschlecht)」を生み出すものであった³¹⁾。しかし、ミヒャエル・クリューガーは、「文化」という言葉によってスポーツ教育の価値づけをはかろうとしたディームの理論構築を次のように評している。「『身体文化』という言葉は、ディームの理解による状況描写ではなく、一つの要求であった。もしスポーツが実際に精神的文化と並んで承認さ

れた『身体文化』と表現されるならば、スポーツの質、道徳的力、教育的可能性を意識させることができるに違いなかった。この芸当を試みたのは、ディームだけではなかった。水泳のハンス・ガイゾウ、スキーのヘニー・ホェック、体育教師のハンス・ジッペル、医者でありサッカー選手であったフェルディナンド・フッペ、作家のビクター・ジルベラーらはすべて、あくこともなく、繰り返しスポーツの価値を公的に宣言していた。個人にとっての、文化にとっての、社会にとっての、そして国民にとっての、スポーツの身体的な教育の価値の主張である³²⁾。

さらに、クリューガーは、ディームの「スポーツ教育」論にみられる軍国主義を次のように指摘している。ディームは、「国際的なスポーツを即座に国家的あるいは『ゲルマン的』なものにした。彼はドイツの国家的詩人、フリードリヒ・シラーの言葉を引用しながら、『スポーツは遊戯である』とか『スポーツは戦いである』という標語を掲げ、ドイツの軍事的で国家主義的な中心点と合致させようとしたのである³³⁾。ディームの「スポーツ教育」論において、この軍国主義は「犠牲心」という言葉によって端的に表現されていた。第一次大戦の終結から第二次大戦へと至る時期、ディームはすでに「犠牲心」という社会的規範意識を、民主的な原則としてではなく、軍国主義的な、そうした意味においてヴィルヘルム体制下での国家主義的な行動規範に即して解釈していたのである。ハジョ・ベルネットは、ディームが1936年のベルリン・オリンピックのプログラムにおいて「スポーツは戦いである」と規定し、これと同じ言葉を1922年の論文集に繰り返し使用していることを指摘している³⁴⁾。「優れた戦闘能力」に関する1931年の講演に至っては、スポーツの「聖なる遊戯」と戦争の「血まみれの真剣さ」の間に深い「魂的な一致」があるとまで明言されている³⁵⁾。スポーツの「競争」は軍人の個人的な「戦い」へと鑄直され、その身体は「軍人的な人間への強健化³⁶⁾」として描かれ、結局のところ、スポーツ教育は最もよい「軍事学校以外の学校での防衛力³⁷⁾」とみなされたのである。

「スポーツは戦いである」という規定を、ディームは、彼自身が「精神的な父」と呼んだクーベルタンから学んだ。ディームは後に「クーベルタンの遺産³⁸⁾」というタイトルのラジオ演説のなか

で披露することになる、クーベルタンからの引用を次のように記している。「スポーツは自由意志にもとづく軍事的な行為である (Soldatentum)。クーベルタンはなんの不足もなくそれを認識し、明晰に判断していた。スポーツは戦争のための訓練を提供するが、スポーツが戦争をもたらすのではない。スポーツは軍人的な情熱を形成し、軍人に必要な身体と精神を形成するが、スポーツが戦争を呼び覚ますのではない。スポーツの存在根拠は、戦争がそこに存在し、我々が世界戦争とともに行動しているときにはじめて示されるのであり、我々はイギリスやアメリカのように、スポーツ選手が優れた軍人となることを知っている³⁹⁾。ディームは、「個人の自主性にゆだねられた戦い」というフランスの市民階級的で個人主義的な競争主義を称揚したクーベルタンのスポーツ理論に学びながら、スポーツの「競争」と戦争の「戦い」を類比させ、スポーツを「自主性」をもって「犠牲心」を身につける教育の機会として主張したのであり、その結果、青少年は「苦勞」「危険」「痛み」に耐えることを学び⁴⁰⁾、「勇気と死への尊敬⁴¹⁾」と「指導者的資質⁴²⁾」を形成すると主張したのである。クーベルタンにみられた進歩主義的な理念を摂取しながら、国家的な価値に身をゆだねようとしたこのディームの努力によって、学校体育においてスポーツ教育を重視しようとする動きも急速に加速化され、後年のディームが、体育 (Leibesübungen/Leibeserziehung) という用語は「Turnen (体操) とスポーツとの争いをさけるときに役立った⁴³⁾」と振り返っているように、教科名称としての「体育」が一般化されると同時に、体育授業は全国的な必修教科として整備され、1920年代には週三時間、ナチ体制下では最大週五時間の時間数にまで拡大されることになったのである。つまり、ディームの軍国主義的な要素を含む「スポーツ教育」論は、学校体育にスポーツ教育を位置づけたのみならず、必修の授業時数を拡大するという、学校体育の量的・制度的拡大に大きく貢献したのである。

もちろん、1933年にナチスが政権を掌握してから後は、ディームのみならず、あらゆる体育組織が国家社会主義に利用された。それどころか、「自己統制の伝統⁴⁴⁾」と表現されるように、多くのスポーツ組織が進んで国家社会主義に協力した。19世紀に帝国が成立したとき、体操家たちが自ら

の中心的思想を捨て、反動的な国家体制に迎合したように、ドイツの体育界が国家権力に追従する姿は、国家社会主義においてではなかった。だが、こうしたドイツ体育界の伝統的な体質のなかにあっても、ディームの「スポーツ教育」論は特別な位置にあったと言わなければならない。なぜなら、スポーツや学校体育を量的・制度的に拡大させようとする意図のものに構築されたディームの「スポーツ教育」論は、その学校体育の量的・制度的な拡大への努力と表裏の関係として、ナチスにスポーツの「国家的な利用価値」を知らしめてしまったからである。例えば、ダフ・ハート・デイヴィスの伝えるところでは、ベルリン・オリンピックをプロパガンダとして利用したアドルフ・ヒトラーも、当初は、オリンピックを「ユダヤ主義に汚れた芝居であり、国家社会主義の支配するドイツでは上演できない」⁴⁵⁾と明言していた。そのヒトラーに翻意を促したのは、スポーツによる宣伝効果を主張したヨーゼフ・ゲッペルスらの働きかけであったと言われるが、スポーツの軍国主義的な宣伝効果を誰よりも早く主張していたのは、他ならぬディームだったのである。だからこそ、ディームは、ドイツの体育・スポーツ史家たちに「スポーツと国家社会主義の媒介者」と評されているのである。

例えば、ディームは、「我々が平和な時代にスポーツ的な鋭い戦いをもつ競争的な戦いにおいて感じていたような喜ばしい興奮が、戦争的な真剣さの高みにもたらされる」⁴⁶⁾と1940年の「フランス横断マラソン (Strumlauf)」の開催に際して宣言し、その後、多数の記事において「オリンピック大会の軍事的な内容」⁴⁷⁾について訴えている。それと同時に、例えば学校体育におけるボクシングについて語られた「攻撃精神」、「稲妻のように速い決断力」といった表現にみられるように、ディームはヒトラーの宣伝文句と同じ言葉を多用している⁴⁸⁾。こうしたディームの主張に続くかのように、メディアによっても、「スポーツと戦争の類似性」が唱えられるようになり⁴⁹⁾、スポーツは英雄主義の媒介物に仕立て上げられていく。こうした趨勢が形成された後に、宣伝大臣のゲッペルスが、最高のスポーツ選手は最高の軍人であると宣言したのである。アルケマイヤーは次のように指摘している。「スポーツと戦争の相互移行は特別のものではない。ナチだけではなく、

19世紀のイギリスにおいても、すでに教育学者によって主張されていたし、クーベルタンによっても二つの領域は結びつけられていた。しかし、重要な違いがある。ヒトラーはスポーツと戦争を違う次元のものとして捉えていたにもかかわらず、ディームはそれを同じものとして認識させたのである。確かに、クーベルタンにとって『戦い』は歴史と社会を推進させるための原理であった。しかし、クーベルタンは、『スポーツ教育』が戦争の現実的な暴力と残酷さを休止させようという、平和運動の一部とスポーツを結びつけるユートピア論に立脚していた。クーベルタンがスポーツの文明的な達成を称揚したとするならば、ディームは、虚構のスポーツ的な『戦い』と現実的な戦争の『戦い』を、同じものとみなさせたのである⁵⁰⁾。グンター・ゲバウアの表現を借りれば⁵¹⁾、まさに、体育・スポーツの量的・制度的拡大を試みたディームの「スポーツ教育」論は、戦争と死の歴史からスポーツを離脱させるという近代スポーツの文化的な偉業を、再び暗黒の過去のなかへと引き戻す結果をもたらすことになったのである。

3.2. 戦後の「スポーツ教育」論にみる自己規律化

ナチ体制の崩壊後、西ドイツ国家の再建をはかろうとしたアデナウアー政権は、内務省の所管のもと、連邦スポーツ担当官を設置し、1950年に、ディームをそのポストに任命する。こうしてディームは戦後もドイツの体育界に大きな影響力を保持し続けることになったのである。戦後ドイツの体育界における「人的連続性」にはすでに多くの批判が寄せられているが、その根本的な要因には、「スポーツの組織的経験の豊かな人材に頼ることを避けられなかった」こと、あるいは「エリート層の連続性」などが指摘されている⁵²⁾。いずれにしても、戦後スポーツ組織の改革者としての役割を担うことになったディームには、当然、新しい「スポーツ教育」論が必要とされた。

戦後、ディームは、「第二次世界大戦とこれによる健康及び道徳の破壊混乱のもたらした、かつてない恐るべき結果を、われわれはよりよきスポーツ教育によってある程度まで除去しうる」⁵³⁾とする立場から、彼の主著の一つである『スポーツの本質と基礎』において「スポーツ教育」論を展開している。その著書のなかで、ディームは「スポーツの本質」を二つの要素の「緊張関係」

として捉えている。なかでも、シラーの遊戯論を引用しながら、スポーツの最大の特徴として「遊び」と「真面目」の緊張関係を強調している。スポーツは遊戯として存在しているが、遊戯だけでスポーツはスポーツとして存在できるわけではない。「遊戯はわれわれが計画的におこなうときはじめてスポーツになる」⁵⁴⁾ と言うのである。第二に、「技術」と「自然」の緊張関係である。スポーツは技術化された近代社会のなかで生み出された、記録や進歩に対する喜びを本質的な特徴としているが、「自然に還れ」というジャン・ジャック・ルソーの言葉に表現されているように、「技術」への反作用としての「自然」への憧憬も隠されている。第三に、「自由」と「義務」の緊張関係が取り上げられる。スポーツは人間が「自由」に選択する主体的行為によって導かれるが、自由に選択されたものであるがゆえにこそ、そこには責任と義務が付随すると言う。第四に「競争」と「協同」の緊張関係が取り上げられる。「競争」はスポーツの本質的な要素であるが、それは「相手を尊重し、ルールを遵守し、公正な態度をとる」という「協同」的行為のもとで遂行される。第五に、「民族的なもの」と「世界的なもの」の緊張である。自然発生的なスポーツはその根底に「民族」的な部分をもち、「民族」固有の文化として存在しているが、それは諸民族の交流によって「世界」的で「国際」的な文化として発展してきたと言うのである。

さらにディームは、それら五つの緊張関係のなかにあるスポーツを遂行する人間について、その自然本性を強調している。ディームによれば、人間の個人的な自由は、自然本性によって制限される。「個人的なものは存在という織物の緯にすぎないのであって、経は自然が織るのである。(自然とは、ただわれわれの外部にあるものばかりではない。われわれ自身も自然の一部なのだ。)」⁵⁵⁾。人間が競争に熱中するのも、激しい競争心という自然的原因にもとづいている。技術化し文明化した社会に対する人間の自然への憧憬もまた、人間の「内面的な自然の力の衝動の現われ」⁵⁶⁾ なのであり、「スポーツは常になんらかの意味で自然に近くあらねばならない」⁵⁷⁾。ディームは、このスポーツの「独自世界」論と「人間の本質」論にしたがいがら、学校体育におけるスポーツ教育の重要性を主張したのである。

そのスポーツ教育の第一義的な意味を、戦後のディームは、「自由」に求めた。スポーツはあくまでも自らが選択した規則のもとでおこなわれるのであり、「機械的軍隊式に、ただむやみやたらに絞り上げるといった訓練は、スポーツ本来の個性化への強い欲求に反するのである—スポーツは一人一人の人間をその本来の姿に立ちかえらせ、生かすべきもの」なのであり、「生徒が自分を伸ばすために自発的におこなうように仕向けるべき」ものなのである⁵⁸⁾。スポーツ教育においては「絶えず自ら行動するエネルギーこそ、人間に真の享受を知らしめ、その天与の才能を開発し高めるもの」⁵⁹⁾ である。しかしまた、同時に、「有益なスポーツ教育をおこなうために第一に必要なことは、教育目標を知ること」⁶⁰⁾ でもある。授業はそれらの目的が子どもたちに受け入れられるように「計画」⁶¹⁾ され「綿密なプラン」⁶²⁾ が立てられなければならない。

この自由のもとでの目標という論理を前提に、ディームはスポーツの「記録」を追求するためにこそ、身体の科学的なトレーニングが重要であると強調した。例えば、「器官の鍛錬」「筋肉の鍛錬」「矯正・補強・調整」などの科学的な分析を求めながら、スポーツの「記録」を「国民の健康を指示する重要な唯一無二の忠告者」であると言い、その「記録」の達成にスポーツの特別な教育力を認めたのである。スポーツ教育においては、記録という目標設定によって「生徒が各自のレコードをだすように導」⁶³⁾ かなければならない。しかし、同時にまた、そのような身体的な側面には、精神的な要素が不可分に貼りついている。ディームにとっては、「精神的作用をとまわらない身体訓練などというものはありえない」⁶⁴⁾ のである。「人間を立派にするには身体を立派にすることが必要なものであり、また高尚な精神で身体を訓練しなければならない」⁶⁵⁾。スポーツという遊戯衝動が発現する場においてこそ、人間は感性と理性、身体と精神の統一を果たすことができる。人間は「快」「不快」という自然の摂理にしたがって自主的に遊戯を選択するが、その自主的に選択された遊戯においてこそ、人間の身体と精神、自由と義務が統一される。その「身体訓練によって円満に鍛えられ陶冶され、親しみやすくなり人間的に結ばれた若人は、物事を公正に判断し、友誼に篤い、情ある人間に成長していく」⁶⁶⁾ ので

ある。個人の記録もまた、「たがいに信頼し助け合って、団体の意志が決定される」⁶⁷⁾ところで達成される。それゆえ、この友好感情は自分のチームと相手チームを包むものであり、相互間の共感、感応によって「学校は生徒にとって単なる授業時間の寄せ集め以上のものを意味するのだという感情が喚起され（中略：引用者）、学校生活に真に生命をあたえ、授業に筋金を入れて共同体価値たらしめる」⁶⁸⁾。だからこそ、スポーツを中心とする学校の祝祭的な催しが必要であると言うのである⁶⁹⁾。こうして、スポーツ教育によって、青少年は「自発的な自己活動」にもとづいて自由な選択にしたがって「自己責任」を遂行するように方向づけられ、「最高の能力に到達しようとするスポーツの努力は、生徒の本質的特性となり、また生活様式となり、さらに、他の領域にもおよんでいく」⁷⁰⁾とみなされたのである。

だが、如何にスポーツの「自由」を称揚しようとも、戦前戦中の学校教育を経験してきたディームが、学校や授業の「強制」的な側面に無自覚であったわけではない。ディームは「全然外部的な強制をおこなわずになしうる授業というものはない」⁷¹⁾と明言している。「学校へ通いはじめるといことは、子供の生活にとっては決定的な一段階である。これまでは、とにかくも拘束されずに運動し、毎日を遊んで暮らすことのできた子供たちに、今や（中略：引用者）、さまざまな組織的な学習の課題がせまってくる」⁷²⁾。ディームは、この学校的な「強制」とスポーツによる「自由」の教育の調和について、イギリスのパブリック・スクールの例を引きながら、次のように述べている。「最も本質的なことは自由に選択することである。遊戯は自由に求められたものであらねばならない。ここに、時間割にしたがって授業をおこなわねばならない体操教師の難かしさが現われてくる。ここには専ら強制のみがおこなわれるといえるかもしれない。が、学校におけるスポーツ教師の心しなければならぬ任務は、かかる強制をできるかぎり感じさせないようにすることにある。事実これはかなり緩和しうるのである。もしも耐えがたいような強制の印象をあたえたすれば、その授業は非常に非教育的におこなわれたといわねばならない。ぼんやりした生徒でも、授業は感性への激しい欲求を実現する道だと思っているのであるから、まして健全な者ならば、こ

の欲求を抱かない者は誰一人ないはずである。さらにこの欲求は身体的技能に関しては特別に強く、あらゆる少年はこの技能を伸ばそうと努めるのである。しかしながら、教師は授業にあたっては、計画が許すかぎり、できるだけ多くの選択の自由を生徒にあたえるよう心がけねばならないし、さらに、教育計画に含まれるべきことはすべて生徒自身が自ら望む要求として受け取り、また計画的な身体教育はすべて自分のスポーツ目標に達するために必要な準備段階であると思うような向上意欲を生徒の心に喚起しなければならない。（中略：引用者）『自らを鍛えようような人間を鍛え育てよ』という英国の教育原理にこれほど切実に直面することはない。スポーツはまさしく自由な選択と義務との結合であり、スポーツにおいては自由に選択するということが義務感情の源泉とならねばならない。自分はみずから進んでスポーツを選んだが故にこそ、そのなかにある義務をはたさねばならないのだ」⁷³⁾。このように、ディームは常に、「外部から課せられた教育計画の一部であるような場合にも、自らを訓練しようとする意志がよびさまされねばならない」⁷⁴⁾ことを強調したのである。子どもは「目標の重要性を評価することを一度知れば、彼はこのような強制をも甘んじて受け容れるのである」⁷⁵⁾。

かくして、「身体」と「精神」の結びつきを強調し、スポーツの「自由」にもとづいて「記録」を追求する身体を形成し、鍛え、自然本性としての「競争」「記録」「共同体的価値」といった教育目標を、自主的に求める主体者を形成しようとするスポーツ教育の「自己規律化」が主張されることになったのである。つまり、ディームは、スポーツの「自由」を基盤としながら、「義務（競争・記録・共同体的価値観などの自然本性）」へと至る「自己規律化」の理論によって学校体育の戦後改革を果たそうとしたのである。言い換えれば、ディームは、「外的規律化」から「自己規律化」への転換によって、学校体育の戦後改革を達成しようとしたのである。

だが、果たして、ナチ体制下のドイツ国民は、本当に「外的」強制によってのみ「規律化」させられていたのだろうか。ディームの戦後の「スポーツ教育」論は、戦前戦中の「身体」をめぐる権力作用と、どの程度の距離をもつのだろうか。もう一度、国家社会主義が標的としていた「身

体」について振り返ってみる必要がある。

4. 身体とシンボル

4.1. 個人主義(Individualismus)と全体主義(Holismus)

戦前に展開されたディームの「スポーツ教育」論にあっても、一方的に「国家」だけが強調されていたわけではない。ディームが「自主性」という進歩的な市民階級の理念をクーベルタンから摂取していた事実は先にも指摘しておいたが、ディームは戦前からすでに、体操家たちのスポーツ批判に抗するかたちで、トゥルネンにはないスポーツ教育の意義を個人の「自主性」に求めている。例えば、1933年の論文のなかで、ディームは次のように述べている。「同じ歩幅と同じ運動で、戦闘部隊としての集合体をつくりあげるドリルは、すでに過去の教育形式である。個別的な形式でおこなわれる今日の戦いには、よくしつけられた個人的な戦闘者が求められている。これは存在をめぐる戦いのなかにおかれた市民的生活に求められているものでもある。スポーツは、よくしつけられた個人的な戦闘者、すなわち記録を求める人間を形成するのである」⁷⁶⁾。さらに、「今日の軍人は、会戦における同じ歩幅での行進ではなく、自らの責任で、自らによって、自らの全ての力を発揮しなければならない。より強力な兵器をもつ相手と闘おうとする我々のような民族にとっては、二重の意味でこのことが必要なのである」⁷⁷⁾。

なかでも、ディームのアマチュアリズムの解釈には、「自主性」の重視が端的に表現されていた。ディームにとって、スポーツ選手が収入をえることは「脱神聖化」を意味するのであり、スポーツ選手が「生計の手段」に奉仕しない「アマチュア」である限りにおいて「生を円熟」させることができ⁷⁸⁾、このアマチュア選手の自主的な「自己献身」こそが「理性的な仕事」だったのである⁷⁹⁾。クーベルタンがアマチュアリズムによって、労働者階級との差異化のもとに、市民階級の特性を美化したのに対して、ディームはそこに自主的な「献身」と「犠牲」の精神を見出したのである。ディームにとって、アマチュア選手は「自由意志による成長と犠牲心において、自らの国の色と民族の名誉のために、諸力を情熱的に」⁸⁰⁾投入する理想的な人間像を表現する存在であった。この「献身」と「犠牲」の精神によって、あらゆる個人は「全体への服従的で奉仕的な構成員」⁸¹⁾

となる。「人格が一つの課題を有しているとすれば、それは我々の義務にもとづいている。我々は、我々自身の完全性へと自らを教育する。その完全性によって、我々は巨大な共同体に最良の奉仕をなす。(中略：引用者) 人格と共同体は相関的概念である。道徳的な人格性は、家族に、国家に、人類に奉仕する」⁸²⁾。こうして、自主的に「共同体」たる「家族」「国家」「人類」へと無条件に献身する個人が理想とみなされたのである。

この理想的な個人のイメージは、古代ギリシアの「軍人の身体」へと結びつけられていく。古代ギリシアと古代神話に関する優れた知識人であったディームは、「古代ギリシアの体育(Agonalen)的な意味」⁸³⁾がスポーツに認められることを繰り返し強調している。ディームによれば、古代ギリシアの体育においては、身体文化にみられる「競争」と「戦争」は類似的な構造で把握され、戦闘者のアイデンティティーという意味において、競争的な身体文化と戦争は同じ位置におかれていた⁸⁴⁾。この類似性を確認した上で、ディームは、「古代ギリシアの教育の賢明さ(中略：引用者)とオリンピック競技という過去の助言」として、スパルタの「しつけ」と「英雄的な国家の統一性」を取り上げたのである⁸⁵⁾。クーベルタンもしばしば古代ギリシアを理想像として描いたが、クーベルタンは貴族のみならず国民が政治的な影響力をもっていたアテネの民主主義を理想とし⁸⁶⁾、スパルタの否定的な側面を硬直化したトゥルネンと結びつけていた。しかし、ディームは、スパルタ的な「しつけ」と「英雄」に理想的な古代ギリシア像を見出したのである。

このディームの理想像は、特に国家社会主義的に再解釈された古典古代の物語、ランゲマルク(ベルギーにある第一次大戦の激戦地)の兵士の聖人伝説に示されている。この物語は、ベルリン・オリンピックの開催年に帝国スポーツ出版から刊行され、オリンピック・プロパガンダの一翼を担った著書におさめられた物語である。「古代から取られた物語」という副題がつけられたその物語において、ディームは紀元前490年のペルシア人に対するアテネ人の勝利という伝説を模写することで、スポーツと戦争の類似性を喚起している。さらに、オリンピックのマラソンの勝者であり、後に模範的な兵士となる英雄は、「均整のとれた筋肉の力強さ」、「巻き毛の金髪」によって表

現され⁸⁷⁾、「血統がよく、長い手足」という「男性的な身体的な強健さ」という特徴のなかに、独特の「やさしさ」が描かれている⁸⁸⁾。身体的な外見は軍人としての規準と記され、その理想的な規準として古代ギリシアの英雄クセノフォンの体型が描写されている。クーベルタンが「生命力のある人間の美しさとまっすぐな身体」に「生命力のない人間の醜聞さと猫背」を対置したのに対して、ディームは「男性性の軟化、身体的な輪郭の喪失、個人の従順さの不足」に「完全に形成された男性性・祖国・軍隊」を対置させた。ディームが描いた兵士でありマラソン選手でもあるその英雄は、一方ではすぐれた古代ギリシア体育的な個人の達成能力において際立つと同時に、他方では国家への無条件の献身と自己犠牲を体現していた。英雄の歴史的行為は、「犠牲行為」の消滅が「祖国の消滅」を意味する場所において具体化され、逆に個人的な行為は高貴な国家の存在によってはじめてその意味が付与される。

この英雄は、ランゲマルクで戦死し、祖国の勝利を知らせる使者として「生の高み」に到達する。ディームはその「精神」を、「祖国」「犠牲の死」「青年」という言葉で美化している。物語は、スパルタの詩人であり、最高指揮官であるテュルタイオスの言葉で締めくくられる。「死は美しい。一人の男が英雄として、祖国のための英雄として、死を受け入れるならば」⁸⁹⁾。ディームの著作は、近代的な個人主義でも、純粋な歴史的一伝統的な性格のものでもなく、その両者を媒介するものだったのである。ディームは、スポーツをトゥルネンとの対比において、近代的な教育の手段として主張すると同時に、スポーツを国家的な共同体と結びつけるために、古代ギリシアのイメージを利用したのである。この物語は、1936年ベルリン・オリンピックの開催直前にラジオ放送で国民にむけて放送され、第二次大戦中の1941年にはレクラム文庫から再版、さらに1943年には軍人図書出版から「マラソン選手」と改題されて再び出版されている。

この物語によって、「個人主義 (Individualismus)」と「全体主義 (Holismus)」をイメージの世界で結びつけようとしたディームの試みは、現実界ではすでに、1934年に具現されていた。すなわち、ディームの企画のもと、ドイツを代表するオリンピック選手たちは、ベルリンの「ドイツオペラの

祝祭」の機会に、祝祭的なオリンピックの誓いを捧げていたのである。彼らは、「ドイツ的なもの」のために全力を尽くすこと、トレーニングのために「生活の欲望を抑え」、「意志」と「身体」を鍛え上げ、「威厳のある巨大な時間に身を捧げ」、「祖国のために戦い抜く」ことを誓った。その誓いの言葉は、帝国スポーツ誌において広く国民に公開され⁹⁰⁾。クーベルタンの市民的な理想は、ディームによって、国家への「献身」と「犠牲」へと結びつけられたのである。こうして「個人主義」と「全体主義」を統合しようとするディームの試みは、ドイツ人の優秀さを古代ギリシアに由来するものとみなし、古代ギリシアの正当性を伝承するドイツ国家のイメージを世界中にアピールしようとする、国家社会主義の流れへと合流していったのである。そのクライマックスが1936年のベルリン・オリンピックであったことは、もはや指摘するまでもないだろう。

4. 2. 伝統意識・国民的祝祭・シンボルとオリンピック

ベルネットによれば、ヒトラーは、「第三帝国は知だけではなく、力と最も高貴な理想を未来の人間像とみなす。強い精神は素晴らしい肉体に存在するのである」という理念のもとに、学校体育における身体形成を重視し、その授業時数の拡大に貢献した。しかながら、ヒトラーが最も成功をおさめた体育・スポーツ政策は、学校体育による身体形成であった以上に、1936年の第11回ベルリン・オリンピック大会でのプロパガンダであった⁹¹⁾。

吉見俊哉が指摘する通り、人種差別や他国への侵略的意図を隠蔽しながら、第三帝国を神聖化するのに役だったのが、ベルリン・オリンピック大会における「伝統の創出」「祝祭・儀礼化」「シンボルの利用」であった。「聖火リレーや表彰式のスタイル、壮大なオリンピック・スタジアムとみごとに演出された閉会式など、今日のオリンピックを特徴づける伝統がこのとき発明された」⁹²⁾のである。さらに、ベルリン・オリンピックでは、17に及ぶラジオの中継局と30個のマイクが競技場内に配置され、世界的規模で競技の様子が実況中継されている。テレビ映像もドイツ国内に放映され、レニ・リーフェンシュタールによる映画『民族の祭典』によって、スタジアムに集まった10数万人をはるかに超える人々にベルリン・オリンピックは体験されていった。

ベルリン・オリンピックにシンボリックな「祝祭・儀礼化」と「伝統の創出」が付け加えられた背景には、三つの大きな流れがあった。第一に、クーベルタンによるオリンピックの「儀礼化」である。オリンピックの開催が議論された1894年のパリ会議において、すでにクーベルタンは参加者の感情的な賛同を促すために、会場を古代ギリシア風にアレンジし、古典主義的な音楽を流すなど、シンボルと感情に訴えるオリンピックの儀礼化を予告している⁹³⁾。第一回のアテネ大会では開会を知らせる号砲がとどろき、大理石のスタジアムに鳩が解き放たれ、カンターテが合唱され、勝者の国旗が掲揚されるなど⁹⁴⁾、それまでの宮廷様式とは大きく異なる儀礼が採用された。1914年には、クーベルタンによって考案された公式のオリンピック旗が示されている⁹⁵⁾。こうしたコスモポリタニズムの強調の一方で、クーベルタンは「宗教的な競技者」という哲学のもとに、オリンピックのシンボルを崇拝すべき神聖なものとなし、クーベルタンは、スポーツの宣教師として、世俗化された世界に対して「オリンピックの炎への礼拝」を薦め⁹⁶⁾、ギリシアの青年がゼウスに捧げていたのと同じように、オリンピックと国家のシンボルへの崇拝を促した⁹⁷⁾。1928年にオリンピック大会への最後の臨席を果たしたクーベルタンは、「宣誓」、「オリンピックの旗」、「開会式と閉会式」という儀礼を含めたオリンピックの「根本原則」に「忠実でありつづる」ように勧告し⁹⁸⁾、1935年8月4日にベルリン・オリンピックの参加者にむけられたラジオ演説においても、ベルリン・オリンピックが「宗教的なものである」ように要求している。

第二に、拙稿において確認したように⁹⁹⁾、ドイツの体育界には、ドイツ体操祭における「伝統の創出」「祝祭・儀礼化」「シンボルの利用」を重視する長い伝統が存在していた。DTは1933年にシュツットガルトで開催されたドイツ体操祭にヒトラーを招待し、ヒトラーは史上はじめてドイツ体操祭で式辞を述べた首相となっている。彼は、その式辞のなかで、ヤーンの著書『ドイツ民族性』を引用し、ヤーンは常に「アーリア的な種」について考えていたのだとその民族主義的な解釈を披露している。「ヒトラーはこのドイツ体操祭において、数千人にも及ぶ若い参加者と観客たちを熱狂させることのできる、大衆的なスポーツ祭のプ

ロパガンダの可能性をはじめて経験した」¹⁰⁰⁾のである。ディームもまた、1916年のオリンピック開催を断念した後、1922年にベルリンとグラミッシュで、1926年にケルンとシュバルツヴァルトで、1930年と1934年にはベレサウで「ドイツ競技大会」を開催したが、それらの大会は一方ではDTのドイツ体操祭に対抗する国家的な祝祭行事として¹⁰¹⁾、他方では「政治的なデモンストレーションとして、国家主義的なイデオロギーの証明」¹⁰²⁾として開催され、スポーツの国家的有用性をアピールしている。

第三に、体育界のみならず、19世紀後半のドイツ社会においては、古代ギリシアの建築様式を模倣した「擬古典主義様式」の建築物が乱立していた。19世紀後半のドイツ国内では、文化的偉人、王族、英雄的軍人の記念碑、彫像、記念博物館、美術館が数多く建設され、そのような建築様式がドイツ体操祭やスポーツ祭の会場にも採用されている¹⁰³⁾。ヘルムート・プレスナーは、こうした建築物の造形を「遅れてきた国民」たるドイツ人が急速な近代化のなかでナショナル・アイデンティティを追い求めた結果であると言い¹⁰⁴⁾、三島憲一は、「遅れてきた国民」が共通の起源、共通の記憶を作為的に制定し、「国民」の創出と社会的統合力を強化しようとする欲望のあらわれであったと指摘している¹⁰⁵⁾。いずれにしても、新しい都市生活において急速に流れ始めた時間、そして貧富の差の拡大などという近代化がもたらす不安のなかで、ラテン世界のフランスに対するギリシア世界の嫡子たる「アーリア人種のドイツ」というドイツ人の自己イメージが膨張していたのである。「遅れてきた国民」たるドイツ人にとって、『小ドイツ化』『大ドイツ化』といった歴史的なゆらぎをとめないながらも、『民族国家』としてのナショナル・アイデンティティを支えるものとして参照されたのがギリシア」¹⁰⁶⁾だったのである。

ベルリン・オリンピックの開催が決定されたとき、組織委員会は、経済的な理由から、新しいスタジアムの建設ではなく、1916年に予定されていたオリンピックのために建築されたドイツ・スタジアムを改築しようとする見解をもっていた。この構想を覆したのが、世界に流布されたヒトラーの「建設しようではないか!」という宣伝文句であった。ヒトラーの意思によって建築されたのは

初めての巨大建築物となったスタジアムは「帝国スポーツ競技場（以下「競技場）」と名づけられた。帝国宣伝省の希望によって、外観は田舎風の切石によって飾られ、古代ゲルマンの民会場のイメージと合致する屋外の舞台が計画に組み込まれ、国家社会主義文学者であるディートリヒ・エッカートの名前がつけられた舞台には、国家社会主義的な劇作家の作品が展示された。「演台」が備えつけられた「塔」を中央に配置することで、ヒトラーがシンボルの中心におかれた。ディームは、開会式において「指導者の塔」から「鐘」をならすことを計画している¹⁰⁷⁾。中世の鐘楼（教会の別棟）は人々が神に近づくために登る山の似姿の表現であり、神聖政治における鐘はカトリック



図2 ベルリン・オリンピックの鐘

(Carl Diem (1942) Olympische Flamme 1. Deutscher Archiv Verlag, Berlin. S.19. 鐘の下部には「世界の若者を呼び寄せる」という刻印がみられる)

の司祭の声の表現であり、ベルリンの鐘は「警告者」のシンボルでもあった¹⁰⁸⁾。さらに、鷲の紋章とオリンピックの輪が刻印された鐘に、ディームは「世界の若者を呼び寄せる」¹⁰⁹⁾音というメッセージを加えている。

ベルリン・オリンピックでは聖火も重要なシンボルの役割を担った。ディームが「オリンピックの炎の思想は、古代からクーベルタンを通し近代の競技に媒介された」¹¹⁰⁾と指摘しているように、聖火はすでにクーベルタンによって提案され、実際にはアムステルダム大会から実施されていたが、聖火の「祭壇」への「奉献」が実施されたのはベルリン大会がはじめてであった。ベルリン大会の聖火は、点火装置によってではなく、古代ギリシアの聖なる森において「生まれた」と説明さ

れた。ディームによれば、聖火の起源はヘステリア（ローマ神）が英雄の炎と犠牲の炎の女神に奉献したものであり、聖火の儀式は「犠牲者の灰」をゼウスの祭壇に奉献したものである。つまり、聖火とは「犠牲の儀式」を表現するものであった¹¹¹⁾。ディームは、凸面鏡によって集められたギリシアの太陽が司祭の手に握られた松明に火をつけ、少女たちが体操によって義崇拝的な振りつけを披露する、という演出を加えている。国家社会主義的な政治集会も炎の神聖性を日常的に利用し、ゲッペルスは「聖なる炎」を宣伝文句として叫んでいたにもかかわらず、国家社会主義による聖火利用



図3 1936年ベルリン・オリンピックの聖火

(Carl Diem (1942) Olympische Flamme 1. Deutscher Archiv Verlag, Berlin. S.127. 三脚は古代様式的に演出されたものである)

は「一般的に黙殺され、その理念は、ディームの功績として称えられている。ディームは偉大なりレーの専門家であり、ポツダムからベルリンへのはじめてのドイツの聖火リレーの指導者なのであった」¹¹²⁾。

表彰式もまた、重要な演出の一つであった。古代オリンピックの勝者には、物質的な贈り物とともに、オリーブ樹と月桂樹による栄冠と飾りが与えられ、晩餐で儀式がしめくられた。1896年のアテネ大会では、この習慣に倣い、ギリシアの王によってメダルと賞状、オリーブと月桂冠が授与され、饞別の晩餐会で幕が閉じられた。その後の大会では、表彰式の重点はメダルの授与に移り、国際オリンピック委員会によって国旗の掲揚と

国家の斉唱が指示されるようになる。ベルリン大会の組織委員会は、そこに「ドイツ柏」というシンボルをつけ加えた。「柏」は古代ゲルマンの天の神のシンボルであり、ロマン主義の絵画によってゲルマン民族の「力と不死の象徴」として描かれたものである。「ドイツ柏」は体操家たちが勝者の表彰に使用していたシンボルであった。トゥルネンの儀礼に精通していたディームは、ベルリン・オリンピック大会の表彰式を次のように計画している。「1936年の勝者は、ギリシアのオリーブの樹の葉に負けないほどの、マルク地方の幹のついた柏の葉で飾られるだろう。偉大な政治家はこの方向を指示し、地位のある芸術家はその場所を創造する」¹¹³⁾。この提案によって、古代オリンピックの遺産にゲルマンの神話がつけ加えられたのである。ベルリン大会の勝者は柏の葉で飾られ、「勝者の名誉の蟻一さらなる行為を呼び起こす」と記された柏の木彫りの副賞が授与された。組織委員会の報告書によれば、木彫りの副賞は「ドイツの本質、ドイツの力、ドイツの強さ、ドイツの親和心の美しい象徴」¹¹⁴⁾を暗示するものであった。

こうして国家社会主義のプロパガンダに利用されたベルリン・オリンピック大会の後、競技場は国家社会主義的な政治集会の場として利用されるようになる。オリンピックの意味はしだいに消滅し、競技場に掲げられていたオリンピックの輪も1943年に外されている。連合軍がドイツの西国境に近づいた1944年11月12日、ヒトラーは16歳から60歳までの一般市民によって構成された民族突撃隊を競技場に動員し、指令官に対する忠誠を宣誓させている¹¹⁵⁾。スポーツ組織の指導部も民族突撃隊の意志統一のために奔走した。ディームの報告によれば、翌年の4月にスポーツ組織の指導部の人々がハーベル（エルベ川支流）前線に配置されたとき、彼らもようやく競技場に飾られたシンボルの意味を疑うようになっていた¹¹⁶⁾。しかし、それでもなお、ディームは最後の抵抗を喚起する必要にかられていた。1945年3月、帝国官房室の地下に掘られた退避壕から、ヒトラー・ユーゲントにソビエトの戦車部隊と対峙するように命令が出されたとき、ヒトラー・ユーゲントはディームの演説を聴いている。「英雄として死す、献身の死は恥ずべきものではない。祖国のために死ぬことは美しいことである」。ハーベル前線の崩落の後、競技場は激しい攻防戦の中心地となる。ベル

ネットはその戦闘の様子を次のように語っている。

ヒトラー・ユーゲントの連隊は、1945年4月28日にソビエト軍から競技場を奪還するための攻撃を開始した。幾人かの少年は、体操を実演披露したときのことを思い出していただろう。ナチ突撃隊の命令によって、ヒトラー・ユーゲントの少年たちは敵の機関銃放射のなかに突撃していった。彼らが競技場を奪還したとき、2,000の死体がオリンピックの会戦場に残されていた。ディートリヒ・エックハート舞台の横の土穴のなかでは悪魔から逃れようとした人々が命を落としていた。1947年、占領イギリス軍の工兵たちは、損傷著しい鐘の「塔」を爆破した。彼らは世界中に知られたオリンピックの「鐘」を地中深くに埋めようとする欲望にかられた。この異常な出来事は、「鐘」の幻惑の意味に対する知識と同時に、「鐘」に模写されたシンボル—鷲の紋章、ブランデンブルク門、ハーケンクロイツ—への憎しみをあらわしている。穴だらけにされ、砕かれたベルリン・オリンピック大会のシンボルは、1956年に再び掘り起こされ、警告の記念碑として展示された。戦争と暴力行為によって命を落とした、全てのオリンピック選手への追悼のために¹¹⁷⁾。

5. おわりに

ディームは、ドイツにおける体育・スポーツの量的・制度的な拡大に大きく貢献したイデオログであった。だが、彼のドイツ体育界における正統性は、体育・スポーツの意義を強調し、その地位を向上させようとする試みにおいてだけではなく、体育・スポーツを国家に従属させたという意味においてもまた、正当な継承者だったのである。この伝統を継承するかたちで、スポーツの国家主義的意義を強調したがゆえに、ディームは国家社会主義にスポーツの利用価値を知らしめ、「スポーツと国家社会主義の媒介者」へと墮してしまったのである。成田十次郎がトゥルネンによる学校体育の授業時数の拡大について指摘した言葉を、ここでも再び引用しておく必要があるだろう。一果たして、我々は、体育は普及すればするだけ良いとか、制度化すればするだけ発展したとあって、手ばなしで賛美してよいのだろうか¹¹⁸⁾。

戦後、アデナウアー政権下でドイツ体育界にお

ける地位を確保したディームは、国家主義的な「スポーツ教育」論からの脱却をはかるべく、パブリック・スクールのスポーツ教育を模範としながら、スポーツの「独自世界」論にもとづく「スポーツ教育」論を展開した。そこでは「身体」と「精神」の相関的關係を強調し、自ら「義務（健康・記録・共同体的価値観などの自然本性）」の遵守へとたどりつく「自己規律化」としての「スポーツ教育」論が展開されたのである。

だが、国家社会主義が標的としていた身体は、軍事訓練的な規律・訓練によって獲得される、単なる物質としての身体ではなかった。国家社会主義は、古代ギリシアからの正統性を受け継ぐ、アリア人種としてのドイツ人というイメージをシンボリックに表現しながら、そのイメージを「大衆」の、「国民」の、無意識的な「身体」に刻み込んでいったのである。戦前戦中におけるディームの「スポーツ教育」論もまた、古代ギリシアの物語に仮託しながら、自主的に国家に犠牲を捧げる古代ギリシア人の「軍人の身体」を「理想的な身体」のイメージとして描いていたのであり、そのシンボリックな表現が、「伝統の創出」「祝祭・儀礼化」「シンボルの利用」によって演出されたベルリン・オリンピック大会において国家社会主義のプロパガンダと合流することになったのである。つまり、ディームの「スポーツ教育」論には、戦前から戦後を通じて、「理想的な身体」イメージを刻むことで「個人」を「全体」に統合するという「身体の規律・訓練化」の機能が、確かに、息づいていたのである。

この「個人の身体」を自主的に「理想的な身体」へと統合させるという「身体の規律・訓練化」の機能は、戦後ドイツの学校体育論において、如何なるかたちで克服されていくのだろうか。次の論稿において、改めて検討することにしたい。

謝 辞

写真の掲載を快く承諾して下さったジャーナリストのユルゲン・シュトライヒ氏、また、ドイツ語資料の収集にご尽力頂いたドイツ・スポーツ大学ケルン（現：日本体育大学大学院）の大槻茂久君に心より感謝致します。

注及び文献

- 1) 加藤元和(1985) カール・ディームの生涯と体育思想. 不昧堂. p.25.
- 2) 加藤(1985), pp.61-63.
- 3) 加藤(1985), p.122.
- 4) Alkemeyer,T (1996) Körper, Kult und Politik. Von der Muskelreligion 《 Pierre de Coubertins zur Inszenierung von Macht in den Olympischen Spielen von 1936. Campus Verlag. Frankfurt,M/New York. S.286-288. ディームの戦争責任を指摘する代表的な文献としては、Blödom,M/ Nigman,W (1984) Sport und Olympische Spiele. Rowohlt Verlag. Reinbek bei Hamburg. Bernett,H (1987) Carl Diem und sein Werk als Gegenstand der sportgeschichtlichen Forschung. in:Sozial- und Zeitgeschichte des Sports. 1. S.7-41. Peiffer,L (1987) Carl Diem und der Sport in der Zeit des Nationalsozialismus. in: Sozial- und Zeitgeschichte des Sports. 1. S.92-104. Teichler,H.J(1987) Der Weg Carl Diems vom DRA-Generalsekretär zum kommissarischen Führer des Gaus Ausland im NSRL. in:Sozial- und Zeitgeschichte des Sports. 1. S.42-104.
- 5) Appel, R (1995) “Mit 17 im Hitlerjugendregiment”. in: Appel, R(Hrsg.) Es wird nicht mehr zurückgeschossen... Erinnerungen an das Kriegsende 1945. Lingen Verlag. Bergisch Gladbach. S.17-27.
- 6) この経緯は以下の文献に詳しい。Laude,A/Bausch,W (2000) Der Sport-Führer. Die Legende um Carl Diem. Verlag die Werkstatt. Göttingen. S.7-10. Bernett,H (1986) Olympia 1936 in der Retrospektive der Massenmedien. in: Sportunterricht. 35-10. S.415, S.419.
- 7) Laude,A/Bausch,W (2000), S.10-14.
- 8) 20世紀初頭の組織的対立を軸とする抗争に先立って、軍事訓練的なトゥルネンの改革を目指した19世紀後半の「遊戯運動」において、すでにスポーツとトゥルネンの摩擦が生じていた。この「遊戯運動」に潜在した「規律・訓練化」とは異なる体育の可能性に関する研究の成果は、昨年の日本体育学会においてその一部を公表済みであり、他の論稿でも発表の予定であるため、紀要論文では取り扱いを避けている。
- 9) 加藤(1985), p.36.
- 10) Diem,C (1914) Bis vor Paris. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.3. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.1551-1565. Laude,A/Bausch,W (2000), S.17.
- 11) 第3回セントルイス大会と第4回ロンドン大会の間に開催された大会。世界各地でオリンピックを開催しようとしたピエール・ド・クーベルタンに対して、ギリシア王ゲオルギオス1世がギリシア

- での恒久的な開催を主張したため、その折衷案として4年ごとの大会の中間年にギリシアでオリンピックが開催されることになった。しかし、その後、ギリシアの政情不安やゲオルギオス1世の暗殺などによって開催されなくなった。現在、この特別大会は公式記録から削除されている。
- 12) Diem,C (1913) Sport und Körperschulung in Amerika. Im Selbstverlag des Deutschen Reichsausschusses. S.42.
- 13) Laude,A/Bausch,W (2000), S.28-38.
- 14) Laude,A/Bausch,W (2000), S.24.
- 15) Laude,A/Bausch,W (2000), S.25-26.
- 16) Laude,A/Bausch,W (2000), S.28.
- 17) ビリバルド・ゲップハルトを中心とする帝国委員会は、結局、体操競技11人、陸上競技2人、自転車競技5人、テニス1人、ボート競技2人の選手をアテネ・オリンピックに非公式に派遣する。しかし、帰国後、その「名誉欲」がDTから非難されることになる。特に、4人のユダヤ人体操選手は「トゥルネンの威信を汚す粗野な体操選手」としてエドムント・ノイエンドルフから厳しく非難されている (Neuendorff,E (1936) Die Deutsche Turnerschaft 1860-1936. Limpert Verlag. Berlin. S.133. Krüger,M (2005) Einführung in die Geschichte der Leibeserziehung und des Sports. Teil 3. Leibesübungen im 20.Jahrhundert. Sport für alle. 2.neu bearbeitete Auflage. Karl Hofmann Verlag. Schorndorf. S.91)。そのなかの一人で、後にオリンピックのメダリストとなるアルフレッド・フラトーは、1933年に「ユダヤ人排斥条項」でDTから除名され、1942年に強制収容所で処刑される。戦後、1987年に、ドイツ体操協会から名誉メダリストとして表彰された。
- 18) 高津勝(1996)現代ドイツスポーツ史序説. 創文企画. pp.252-253.
- 19) 唐木國彦(1977)「トゥルネン＝スポーツ抗争」と労働者体育家連盟. 一橋論叢. 77-1号. pp.21-27.
- 20) 成田十次郎(2002)近代ドイツスポーツ史Ⅲ ドイツ体育連盟の発展. 不昧堂. pp.221-222.
- 21) 加藤(1985), p.18.
- 22) 加藤(1985), pp.41-44.
- 23) Laude,A/Bausch,W (2000), S.31.
- 24) Krüger,M (2005), S.103.
- 25) Krüger,M (2005), S.106.
- 26) Krüger,M (2005), S.103.
- 27) 加藤(1985), p.52.
- 28) 加藤(1985), p.52.
- 29) Laude,A/Bausch,W (2000), S.40-41.
- 30) Krüger, M (2005), S.110.
- 31) Laude,A/Bausch,W (2000), S.35.
- 32) Krüger,M (2005), S.110.
- 33) Krüger,M (2005), S.112-113.
- 34) Bernett,H (1987), S.37.
- 35) Diem,C (1931) Wehrhaftigkeit. Aus einem Vortrag vor der Heeresschule für Leibesübungen in Düsseldorf. in: Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.87.
- 36) Diem,C (1933) Wesen und Wert des Sports. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.115-116.
- 37) Diem,C (1931), S.93.
- 38) Diem,C (1938) Das Erbe Coubertins. Rundfunkansprache. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.257-259.
- 39) Diem,C (1933), S.115.
- 40) Diem,C (1933), S.115.
- 41) Diem,C (1932) Persönlichkeit. Vortrag vor der Studentenschaft der DHfL. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.57.
- 42) Diem,C (1932), S.52.
- 43) カール・ディーム：福岡孝行訳(1966)スポーツの本質と基礎. 法政大学出版会. p.24.
- 44) クリュエーガーは、ドイツ体育界の国家社会主義への「国家権力」への追従を評して、「自己統制」と厳しく批判している。Krüger,M (2005), S.136.
- 45) ダフ・ハート・デイヴィス：岸本完司訳(1988)ヒトラーへの聖火. 東京書籍. p.14. 伊藤守(2004)規律化した身体の誘惑—ベルリン・オリンピックと『オリンピア』. 清水論編. オリンピックスタディーズ. せりか書房. p.91.
- 46) Diem,C (1940) Sturmlauf durch Frankreich. in: Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.124.
- 47) Diem,C (1943) Olympia-Vortrag im Russenwald. Feldzeitung. 909. in:Carl-Diem-Institut (Hrsg.) (1982) Carl Diem · Ausgewählte Schriften. Bd.2. Hans Richarz Verlag. Sankt Augustin. S.296-298.
- 48) Hitler,A (1933) Mein Kampf. Eher Verlag. München. S.454.
- 49) Teichler,H.J (1991) Internationale Sportpolitik im Dritten Reich. Karl Hofmann Verlag. Schorndorf. S.287-290.
- 50) Alkemeyer,T (1996), S.293-294.
- 51) Gebauer,G (1986) Das Spiel gegen den Tod. in: Hortleder,G/Gebauer, G (Hrsg.) Sport-Eros-Tod. Suhrkamp Verlag. Frankfurt,M. S.278.
- 52) 高津(1996), pp.143-145.
- 53) ディーム(1966), p.46.
- 54) ディーム(1966), p.10.
- 55) ディーム(1966), p.8.

- 56) デイーム (1966), p.11.
- 57) デイーム (1966), p.11.
- 58) デイーム (1966), p.137.
- 59) デイーム (1966), p.19.
- 60) デイーム (1966), p.29.
- 61) デイーム (1966), p.30.
- 62) デイーム (1966), p.126.
- 63) デイーム (1966), p.133.
- 64) デイーム (1966), p.69.
- 65) デイーム (1966), p.131.
- 66) デイーム (1966), p.32.
- 67) デイーム (1966), p.35.
- 68) デイーム (1966), p.36.
- 69) デイーム (1966), p.36.
- 70) デイーム (1966), p.37.
- 71) デイーム (1966), p.33.
- 72) デイーム (1966), p.52.
- 73) デイーム (1966), pp.14-15.
- 74) デイーム (1966), p.33.
- 75) デイーム (1966), p.34.
- 76) Diem,C (1933), S.116.
- 77) Diem,C (1931), S.93.
- 78) Diem,C (1926) Zum Amateurbegriff. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.181.
- 79) Diem,C (1926), S.182.
- 80) Diem,C (1933), S.117.
- 81) Diem,C (1908) Sport ist Kampf. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.29.
- 82) Diem,C (1932) Persönlichkeit. Vortrag vor der Studentenschaft der DHfL. in:Diem,C (1942) Olympische Flamme. Bd.1. Deutscher Archiv Verlag. Berlin. S.57-58.
- 83) Diem,C (1936) Olympia neuer Zeit. Organisationskomitee für die XI. Olympiade Berlin. Org. kom. f.d. IX Olympiade Verlag. Berlin. S.11. Diem,C (1934) Olympische Verknüpfung II. Athens ewige Flamme. in:Olympia-Pressedienst (Hrsg.) Organisationskomitee für die XI. Olympischen Spiele 1936 e.V. Berlin. S.1.
- 84) Vernant,J,P (1987) Mythos und Gesellschaft im alten Griechenland. Suhrkamp Verlag. Frankfurt,M. S.27-29. Hartsock,N (1991) Nullsummenspiel der Ehre. in:Das Argument. 187. S.335-348.
- 85) Diem,C (1934), S.1.
- 86) Murray,O (1986) Das frühe Griechenland. 3.Auflage. TD-Taschenbuch Verlag. München. S.244-245.
- 87) Diem,C (1941) Der Läufer von Marathon. Eine Erzählung aus dem Altertum. Reclam Verlag. Leipzig. S.13-14.
- 88) Diem,C (1941), S.13.
- 89) Diem,C (1941), S.73.
- 90) 著書不明(1934) Reichssportblatt. 44. S.1225. Alkemeyer,T (1996), S.299.
- 91) Bernett,H (1988), S.181.
- 92) 吉見俊哉(1994)メディア時代の文化社会学. 新曜社. p.149.
- 93) クーベルタンは、そうした演出の結果、「ヘレニズムが広い空間にあふれ出し、会議は目的に到達した」とも報告している。Coubertin,P (1959) Olympische Erinnerungen. Limpert Verlag. Frankfurt,M. S.26.
- 94) Coubertin,P (1959), S.40.
- 95) Coubertin,P (1959), S.147. オリンピックの輪は国際オリンピック委員会が法的な商標権を所有している唯一のシンボルでもある。
- 96) Coubertin,P (1929) Olympia. Rede im Festsaal des Bürgermeisteramtes des 16. Arrondissements in Paris 1929. in:Carl-Diem-Institut (Hrsg.) (1967) Der Olympische Gedanke. Reden und Aufsätze. Pierre de Coubertin. Karl Hofmann Verlag. Schorndorf. S.133.
- 97) Coubertin,P (1959), S.160-195.
- 98) Coubertin,P (1929), S.122. また、ハンス・レンクは、世俗化した「宗教に関する誤解」の証拠として、国際オリンピック委員会の参加者を「オリンピックの聖職者」と呼ぶデイームの言葉を引用しながら、クーベルタンの「擬似宗教的な解釈」を重大な間違いと特徴づけている。Lenk,H (1972) Werte, Ziele, Wirklichkeit der modernen Olympischen Spiele. 2.Auflage. Karl Hofmann Verlag. Schorndorf. S.23-25.
- 99) 拙稿 (2007) 近代ドイツのトゥルネンにみる「身体」と「権力」. 弘前大学教育学部紀要. 98号. pp.45-58.
- 100) Krüger,M (2005), S.136.
- 101) Krüger,M (2005), S.115.
- 102) Eisenberg,C (1999) Englisch Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939. Ferdinand Schöningh Verlag. Paderborn/München/Wien/Zürich. S.358-359. Krüger,M (2005), S.114-115.
- 103) これらの建築物とトゥルネンの関係に関してはジョージ・モッセの著書に詳しい。ジョージ・モッセ：佐藤卓己他訳(1994)大衆の国民化. 柏書房.
- 104) ヘルムート・プレスナー：松本道介訳(1995)ドイツロマン主義とナチズムー遅れてきた国民. 講談社学術文庫.
- 105) 三島憲一(1983)生活世界の隠蔽と開示ー19世紀における精神科学の成立 上. 思想. 10号.

- pp.87-116.
- ¹⁰⁶⁾ 伊藤 (2004), p.98.
- ¹⁰⁷⁾ Diem,C (1934) Die Olympischen Spiele Berlin 1936. in:Carl-Diem-Institut (Hrsg.) (1982) Carl Diem・Ausgewählte Schriften. Bd.2. Hans Richarz Verlag. Sankt Augustin. S.228.
- ¹⁰⁸⁾ Bernett,H (1986), S.384.
- ¹⁰⁹⁾ Diem,C (1937) Die Vorbereitung der Spiele. in: Carl-Diem-Institut (Hrsg.) (1967) Der Olympische Gedanke. Reden und Aufsätze. Carl Diem. Karl Hofmann Verlag. Schorndorf. S.75.
- ¹¹⁰⁾ Diem,C (1965) Gedanken zur Sportgeschichte. Karl Hofmann Verlag. Schorndorf. S.21.
- ¹¹¹⁾ Bernett,H (1986), S.369.
- ¹¹²⁾ Bernett,H (1986), S.385.
- ¹¹³⁾ Diem,C (1934) Olympische Verknüpfung. Charlottenburg Verlag. Berlin. S.23.
- ¹¹⁴⁾ Organisationskomitee für die XI. Olymadiade (1936) XI. Olympiade Berlin 1936. Amtlicher Bericht. Bd.1. Limpert Verlag. Berlin. S.127.
- ¹¹⁵⁾ Bernett,H (1986), S.393-394.
- ¹¹⁶⁾ Diem,C (発行年不明)Ein Leben für den Sport. Erinnerungen aus Nachlaß. Carl-Diem-Institut (Hrsg.) (1974). Henn Verlag. Ratingen/Kastellaun/Düsseldorf. S.214-216. Bernett,H (1986), S.394.
- ¹¹⁷⁾ Bernett,H (1986), S.395.
- ¹¹⁸⁾ 成田十次郎(1970)体育はこれでよいのか. 清水重勇他著. 私たちと近代体育. 福村出版. p.116.
(2008. 1. 16受理)